

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

俺の脳内選択肢が学園ラブコメ（男だけ）を全力で助けてくれる。

【作者名】

藤原久四郎

【あらすじ】

絶対選択肢 彼の頭の中でのみ聞こえる無駄にイケメンなボイスが提示してくる選択肢の事で、どんな無理難題だろうと拒否権は無く選ばずにいれば頭痛が起こり最終的には死に至る。らしい。

しかも厄介な事に現実では起こりえない事象でさえもいと簡単起こってしまうトんでもさだ。

選べ ッ！

ラブライブ！の世界で苦難の日々を一年間過ごす。

ホモライブ！の世界で濃厚な余生を過ごす。

はてさて天草奏の運命や如何に。

筆者が投稿している別作品とは関連がありません……せん（曖昧）。
そちらにてやった嘘予告をちょっとだけ書いていこうと思いたった

見切り発車の企画です。

脳内選択肢

選べ　　ッ！

ラブライブ！の世界で苦難の日々を一年間過ごす。

ホモライブ！の世界で濃厚な余生を過ごす。

数秒間の酩酊感の後、俺はいつも通いなれている通学路ではなく見知らぬ景色が視界一杯に広がっている事をぼんやりとした意識の中で把握する。

「う、ううは……？」

さっきの選択肢、確か俺は　のラブライブの世界で〜という選択肢を選んだはず。最近深夜アニメを見ていてラブライブというアニメを見てハマっていたので、というよりは消去法でラブライブの世界に行くしかなかった状況だったのだが。大体なんだよホモライブってよくあるとりあえずホモネタしとけば良いってもんじゃねえだろ選択肢。というかこの選択肢考えてるの空さん（脳内選択肢神を作った神、初恋の人、そして女）だよな、初恋の人腐女子とか嫌だわトラウマもんだわ。

そんな思考をしながら肝心なその選択をしたという記憶がない事に気が付く。前にも似たようなパターンがあったんだが……確かその時は

「やべえ！　遅刻だ遅刻ッ！」

「は……？」

後ろから太陽を思わせる底なしの元気を感じさせる“男”の声が見知らぬ景色に響き渡っていく。

俺が振り返ると脇目も振らず、前すら見ずにひたすら全速力でこちらに走ってくる一つの影が確認できた。勿論の事あまりに突然の事で避ける事すらままならない。

「ああ……災難だ」

一秒と立たずに思い切り石を腹に投げつけられたような衝撃が襲い、見知らぬ道路に思い切り叩きつけられる。ぶつかってきた男の叫び声と共に見知らぬ景色の空に見知らぬ人の顔が浮かんでいるのをおぼろげになりつつある意識の中ぼんやりと知覚する。

そしてその顔が徐々に近づいている事が最後に感じられたことだった。

「ん……」

見知らぬ景色に選択肢のせいでぶち込まれたかと思えば今度は見知らぬ天井か。正直何度経験したことかわからないので慣れきっているのだが。

「ってて……なんか体中が痛いぞ……しかもなんか唇のそこだけ不自然に濡れてるし」

もはや俺の認識が追いつくレベルを超える事象の連続に正直頭がまいりかけている。だがこれも何度経験したかわからないので対処法はいくつかある。

「とりあえず辺りを確認、布団、か。誰かに寝させられたのかな？」

上半身だけ身体を起こすとどつやら俺はベッドの上で、丁寧に布団までかけられて寝ていたようだ。しかもなんかこの布団臭い。なんというか自分の布団と同じというか凄く雄臭い。

「とりあえず出てみるか」

雄臭い布団を丁寧にどけた後すぐ先に見えた扉に向かおうと立ち上がった瞬間、目の前にあった扉が勢いよく開かれた。

「お、起きたか。体、大丈夫か？」

「あ、はい。大丈夫です」

突然の来訪者に思わずたじろぎながら相手を観察する。記憶を辿っていくと、そういえばこの男にぶつかられたな。という確かな記憶が呼び起され、記憶の人物と特徴を照らし合せてみる。髪は日本人ではありえない、いや人類としてあり得ないであろうオレンジ色。染めたにしてはやけに様になっているというか自然すぎる色合い。そ

の不自然な髪は肩まで伸びており、更に女装すれば女でも通用しそうなモデル顔負けの整った顔立ちをしている。

おぼろげな記憶と照らし合わせてみた結果俺に強烈なタツクルを鳩尾にかましてくれたのはこの男であることがはっきりわかった。そんな情報収集よりも先に今、俺が置かれている状況の把握が最優先事項だ。脳内選択肢による世界移動では真っ先にすべき事だ。

「あの……先に名前聞かせてもらってもいいですか？」

「ああ、すまん。まだ名乗ってなかったな。俺の名前は」

考えればわかっていた事だ。不自然なまでに似合っているオレンジ色の髪、最近見た事のある特徴を持った美少年。これが指し示す答えは。

「高坂、高坂穂乃道だ。まあ好きに呼んでくれ」

嫌な予感的中した。

「え？ 穂乃道？ ごめんもう一回」

「だからあ、稲穂の穂になんかよくわからない乃、それに道路の道って書いてほ、の、み、ち。これでいいか？」

「ええ……」

どうやら俺は選択肢を間違えてしまったようだ。

一心ラブライブの説明をしよう。学院廃校の危機に襲われた音ノ木坂学院の生徒、高坂穂乃果はどうにかして学院廃校を阻止しようとした。その時ひらめいたのがスクールアイドル、学園単位で行われるアイドル活動だ。最初は幼馴染である園田海未や南ことりと共にアイドルを結成。それから人数を増やしながら廃校を阻止するために活動をしていく、というのが大まかな流れだ。最近若者を中心に一躍ブームになり、その大きな流れの中俺はその波に吞まれ、ドハマリしたのだ。

本来、ラブライブの世界に行ったのならスクールアイドルの美少女達が俺を迎えてくれたはずだろう。だが現実はいケメン過ぎる男が

ラブライブの世界の穂乃果というキャラを彷彿とさせる容姿で、しかもほぼニアピンの名前で登場したときたもんだからもうこれ何が何だかわかんねえよ。

つまり、俺は。

ホモライブ！とかいう世界に迷い込んだようだ。

穂乃果ではなく穂乃道

前回までのホモライブ！

NO！ラブライブ！

YES！ホモライブ！

目の前のオレンジ色の髪を肩まで伸ばした整った顔立ちの青年、彼は苗字を高坂、そして名前を穂乃道と言った。よし奏、一旦落ち着こう。こういった時はクールに冷静に焦ってはいけない。

「ってなんだよホモライブって！俺はラブライブの世界を選んだろ！」

無理ですね。とてもではないが落ち着いてられない。ツッコミが体に染み込まれている以上は突っ込まざるを得ない。しかも地味にラブライブの高坂穂乃果の雰囲気を残している所が腹立たしい。絶対選択肢ってやっぱり最低最悪だ……。

「お、おい大丈夫か？急に叫びだしたりして」

穂乃道が心配そうにこちらを覗き込んでいる事に気が付き、自分がいかに取り乱していたかを実感する。よし……一通りぶちまけたから落ち着いた。

「ああごめん。ちょっと取り乱したただから」

「おいおい大丈夫かよ……というか見ない顔だが、引っ越してもしてきたのか？」

「ああ、それは 痛ッ……」

こういう時まで絶対選択肢の制約はあるのか……。絶対選択肢に関することは他人に喋ることは出来なくて、それでも話そうとすればまたしても忌まわしい頭痛が襲い掛かってくるわけだ。

そして、絶対選択肢は空気を絶対に読まない。

選べッー！

素直に、「今日、引っ越してきた」という。

素直に、「俺、ホモなんだ」という。

「意味わかんねえよ!」

「お、おい……」

穂乃道もとうとう驚きを隠せない、といった様子でたじろぎながらこちらを心配そうに見ている。そうこうしている内にも頭痛は徐々に増していつていく。そもそも選ぶ程の事でもない選択肢だ。

「実は……今日、引っ越してきたんだ。だから勝手もわからず辺りをうろついていたんだ」

キチンと説明も加えつつ選択肢に提示された条件を口に出す。すると痛みが嘘のように消えていくのを、もう既に疲れ切った頭の中でおぼろげに理解していた。

「ああそついつとか。なら辺りの説明でもしてやろうか？ 困った時はお互い様だしな」

俺の口から出た嘘を疑うことなく受け取ってくれた穂乃道は親切な事に、紙にスラスラと簡易地図の様な物を書き始める。

そして五分と立たずにほれ、と手渡してくれた紙には簡易と呼ぶにはしっかり書かれたすぎた、辺りに何があるかを書き記してあり地図であった。

軽く地図に目を走らせていくと、辺りには神社や音ノ木坂と書かれた学院があることが分かった。絶対選択肢も面倒なのかこの辺の立地とかはラブライブの世界のままの様だ。それはこちらにとっては好都合で、言ってしまうえばラブライブのアニメとそう変わらない世界、ということだ。

「ありがとう穂乃道。じゃあ俺はそろそろ行くよ」

感謝の言葉を述べながら、作ってもらった地図を丁寧に折り畳み、来ている服のポケットに大事にしまつ。

「ああこつちこそ悪かったな。じゃあまたどこかで会つかもしれないし、またな。っていつとくわ」

「おう、じゃあまたな」

別れの言葉を述べた俺は穂乃道の家を後にするべく玄関の方へ向かって歩き出す。当たり前のように帰ろうとしているが初めて来た家なので勝手がわからず、結局穂乃道に玄関まで見送りをさせることになってしまった。

「あ、聞き忘れてたんだが」

玄関で脱がされていた靴を再び履きなおしていると、穂乃道が突然思い出したように口を開いた。

「ん？ 何かな」

「えーっと、そのだな……」

妙に煮え切らない様子でも「もごと口を動かしている穂乃道。どいう状況なのか俺にはわからず、穂乃道が口を開くまで靴を履き終えたまま待たされる。

「えーい！ 俺にぶつかってからの事覚えてるか？」

ぶつかってからの事か……穂乃道の必死の剣幕と声音に圧された俺は必死に記憶の糸を手繰り寄せるべく、思い出そうとしてみるものの、思い出せるのはぶつかってから見えた雲一つない空の事だけだ。

「うーん、悪い。なんにも覚えてないな……」

「お、そうか！ ならいいんだ！ ……よし大丈夫」

後半は何を言っているかわからなかったがどうやら特に思い出さなくても問題ないようで穂乃道も満足げな様子だ。

「じゃあ、今度こそいくわ」

「おう！ じゃあまたな！」

「うーん……どうするか」

何の計画も無く穂乃道の家を出てから、地図と睨みあいしながらこれからどうするかを考えていた。そもそも俺の家がどこにあるのかがわかっていないのが辛い。そもそもこういった世界移動するタイプの選択肢なら大抵一日かからず元の世界に戻ることが出来ていたのだが、今回の場合いつ戻れるかの指定も何もないので正直手詰まりの状況なのだ。

とりあえず辺りをぐるぐるについて情報を集めるのが先決だろうか。そう考えたら行動だ、一番近いのはと……神社か、何かあるかはわからないがお祈りの一つくらいはしておけば神様もきくと見ていくれるだろう。あ、でも神ってどんな人だろう。いつものチャラ神（奏の絶対選択肢を消すための補助の役割をする神、ほぼ役に立たない。）みたいな神ならこっちから願い下げだが。

「よし、いくか」

そう決意を新たに一步を踏み出した瞬間、すっかり慣れた脳に響く無駄にイケメンなボイスが聞こえてきた。

選べよっ

神社に辿りつくが、何か起こる。

神社には辿りつけないが、何も起こらない。（別イベントあり）

宇宙の神秘を見る。

平和ってなんだっけ。

「じつはどこの『世界』」

前回までのホモライブ！

選択肢、貴様だけは絶対にゆるさん！！

再び俺に選択を迫る声が脳内に反響する。結局俺は自分の意志で様々な事を選択しているようで、脳内選択肢に振り回されているだけなのだ。さて、今回の選択肢だがいくつか問題がある。

脳内選択肢は基本的に二択、酷い奴が一つで更に輪をかけて酷いものが一つ。これが基本の形だ。だが時折その例に合わないものが出てくる。それが今回のパターンだ。三択の場合だといつにもまして一つしか安全、いや一つは大抵安全なのだ。残りの二つが拙い事にひとつはまず意味が分からない。

宇宙の神秘を見る。

残念な事に脳内選択肢の前では本当に見せられることになるのだ。下手をすればいきなり何も無い状態で宇宙空間に投げ込まれ、死ぬこともあるだろう。まあ論外だ。

神社に辿りつくが、何か起こる。

「一見安全そうに見えるだろ？これ罠なんだぜ……。前半はあくまで油断させるための罠で、キモは後半だ。何か起こる。何かってそれはもう何が起こっても不思議ではない。空からいきなりマグロが一億匹降ってくることも、突然目の前に爆弾が現れたり、いきなり命を狙われることになっても、あり得るのだ。」

つまり実質一択というのはこういうことだ。

神社には辿りつけないが、何も起こらない。(別イベントあり)

別イベントありはイベントと明記されているだけ良心的だ。つまり本来起こるはずだった神社でのイベントをカットさせてもらっぜ、という代わりに別イベントだZEというわけだ。勿論の事これを選択する。

すると目の前に幻覚で見えていた選択肢が消え、見慣れない景色が再び視界一杯に広がる。そういえば神社には辿りつけないってどういうことなんだろう。物理的に行けないのか、それとも「な、なんだここはッ!! 前も通った道だぞッ!!」みたいなスタンド攻撃に会うのだろうか。

一つ言える事は触らぬ神に祟りなし、という事。

俺は神社の方へ向けていた足をリターン。目的地を次に近くにあった駅と書かれた場所に変更した。

地図を頼りに勝手知らぬ土地を歩くこと十分、人がごった返している駅にたどり着いた。駅名は秋葉原と書かれており、どうやらここはラブライブの世界でも出てきた秋葉原辺りというわけらしい。

だからと言って知らぬ土地であることには変わらず、結局どうしたらいいのかもわからない。不審者よろしく辺りを見渡してみるものの、ただの秋葉原と言った景観で何も得られるものはない。さてどうした物が……。

「ちよっとアンタ」

変質者の如く周りを見渡していたせいか、後ろから誰か女の人から声をかけられてしまった。マズイマズイ、これは「キヤークイツイ変態です!」みたいなパターンだろうか。この世界で俺を知っている奴はいないはずだから誰かから声をかけられるはずもないからな。こっもいきなり最悪のパターンから考えるのは、脳内選択肢と付き合い始めた頃からの鉄則になっているのだ。

「ちよっともっ無視しないでよ、っ」とー」

そう言っって声の主はそういったかと思っつと俺が振り向く前に、俺の目の前に飛び出してきた。俺の目に映ったのは長い黒色の髪を二つに縛った、所謂ツインテールにした少女の様な外見をした女の子だった。俺は本来この世界居ないはずの人間なのでこの世界に知り合いはいないはずだが、だが目の前にいる彼女は何故か俺の記憶に引っかった。

「え……………」

「え……………」

俺と目の前の彼女の声がいい具合に重なる。俺は疑問をはらんだ声。彼女は困惑の色をした声だ。

「ちよっ……………すみません、人違いでした……………」

本当に俺と探し人を間違えたようで声の主である彼女は俺の目の前から去ろうとするが、俺も一目彼女を見て簡単に逃がすわけにはいかなかった。

「ちよ、ちよっと待ってー！」

俺は引き留めるべく素早く移動し始めた彼女の腕を勢いよく、だが女の子なのでできるだけ優しくつかむ。

「じゅんなさーってー！ 人違いでしたー！」

「だから別に怒ってゐるわけじゃないから！ ちよっと話聞いてくれー！」

俺の声の様子から危害を加えようとしていないのを理解したのか、必死に逃げようとしていた彼女はピタリと足を止め、こちらに背を向けたまま溜息を吐いているようだ。

「……………何よ、アンタが誰かは知らないけどサインとかはお断りよ……………」

そう言っってこちらを振り向いた彼女の顔は、本来このホモライブ！とかいうわけのわからない世界には居ないはずの。。。

まず状況を整理しよう。俺は選択肢を間違えホモライブとかいう意味のわからない世界にぶち込まれたはずだ。その根拠としては先

程出会った高坂穂乃道と名乗った、ラブライブのキャラである高坂穂乃果に似通った容姿のイケメンの男は居ないはずだ。

ならばここはホモライブというちょっとアレな世界の筈で、決してラブライブの世界ではないはずだ。ならば。

「矢澤にっさん……？」

俺の目の前にいるラブライブの世界で登場する筈の彼女は一体誰なんだ？

曖昧me地雷

前回までのホモライブ！

矢澤は……存在したッ!!

「矢澤に……?」

その人は俺の見ていたラブライブというアニメで出てきた登場人物であってホモライブとかいう得体のしれない謎のコンテンツには存在しないはずだ。というかホモライブってラブライブのパロディの様な物なのだろうか。

「ちょ、ちょっとアンタ。周りの人がこっち見ているから……」

「はっ……」

目の前の矢澤にこさんに言われてから気が付いたが、周りを見ると通行人の視線が痛いほどに突き刺さっている。それは俺や矢澤さんが騒いでいたせいなのか、それとも傍目から見たら、幼い子を思い切り引き留めているようにしか見えない俺のせいなのか。

皆目見当つかないものの、このままではいけない事を俺の危機感センサーがピンピンに告げている。いや、そんなものないけどな。

「とりあえず移動しましょ。そこで少しなら話聞いてあげるから」

矢澤さんがこちらに耳打ちしてきた提案に俺は首を縦に振る。そして逃げるように二人で走り出し、駅を後にした。

場所を移した俺と矢澤さんは、駅からそう遠くない位置にあった、誰でも知っていきそうな某珈琲ショップに来ていた。

「で、アンタは私になんのようなの?」

「コーヒー、ではなく新メニューらしいストロベリーシェイクカプチーノ、という長い名前の身体に悪そうな色の飲み物を啜りながら、若干不機嫌そうに矢澤さんは口を開く。

「なんかすみません、でも少しでいいので話を聞かせてもらっていますか?」

「内容にもよるけどね。ラブライブの事なんかや私たちの事は言つつもりないわよ?」

聞こうと思っていた事を先に釘を打たれてしまった。だが逆に言えばこの世界ではラブライブがあった、つまりラブライブの世界である可能性が高くなったという事だ。

しかしそうすると、あの穂乃道というラブライブのキャラクターである穂乃果に類似した彼は一体何者だったのだろう。正直、選択肢の事だから予想してもその予想の遙か斜め上を全速力で飛ばしてくるからな……。

「で、何も用がないならこの後待ち合わせあるから帰っていいかしら?」

「じゃ、じゃあ一つ聞いていいですか?」

「わかったから早くしてくれない?」

「え、えーと……矢澤さんって今何歳ですか?」

「は……?」

俺の質問、それは年相応の淑女に言おうものなら地雷。そして、世間では女性に言うのは体重の話などと共にタブーとされる話題。

即ち、年齢。Age、Years。

「アンタ……私ってそんなに幼く見えるのかしら?」

擬音で言えばゴゴゴといった文字が見える。ジョジョ風に言うなら
らっどどどッー

そんなことはどうでもよくて、目の前の矢澤さんはどう考えても不機嫌そのものだ。聞き方が直球過ぎたとは言え、これがある意味一番自然かつ、怪しまれずに一つの結論を得る手段だったのだ。

「えっと、その……別に馬鹿にしているとかそういう訳ではなく……」「じゃあ……どうして?」意味なの?」

あ、ヤバい。これはぶらの(元)の世界のクラスメイト。俺に対して厳しい(怒らせた時と同じ雰囲気だ。

選べって。

「ごちやーん！ 可愛い可愛いー！」と言って高い高いする。
「ねえ……俺、自分より背の低い子に興奮するんだ」と、にじり寄りながら言う。

困った時でも役に立たないどころか、余計頭痛のするような選択肢を投げ捨ててくるあたり脳内選択肢は流石と言える。しかも一つは犯罪、犯罪なんだ。

俺は黙って座っていた椅子から立ち上がり、向かいに座っている矢澤さんの下へ歩み寄る。

「な、何よっ」

一度深呼吸。慣れた相手でも絶対にやりたくない、やれない事を初対面の矢澤さんにしないといけないこの現実。選択肢特有の頭痛が徐々にレベルを増していく。やりたくなくてもやる。不可能が可能になる。選択肢は クソだ。

「ごちやーん！ 可愛い可愛いー」

半泣きになりながらも選択肢に提示された通り、あの舐め腐った台詞を嫌々吐きながら矢澤さんを抱きかかえる。そして子供をあやす時の様に高い高いを、頭に鳴り響く頭痛が収まるまで、つまり選択肢が満足するまで続行する。

その間矢澤さんは呆気にとられた表情のまま固まり、俺の高い高いを成すがままに受け入れている様だ。そして客席にいる他のお客様は俺の声に振り向くも、俺の行動を見た途端に目を逸らしていたので、精神衛生は多少よろしかった。

そしてある程度高い高いを継続した所で頭痛が収まる。そして同時に視界に広がっていた忌まわしき選択肢も消えていった。

そして、選択肢から解放された俺のすべき事は一つだ。

「本当に申し訳ございませんでした」

抱きかかえていた矢澤さんを素早く地面におろし、俺はその地面に

額を貼り付ける。しかし矢澤さんは俺の言葉が耳に届いていないのか、未だに呆けたまま固まっている。

するとそんな静寂を見かねたのか、矢澤さんの方から携帯の着信らしき電子音が店内に響き渡った。その音に引き戻されるように、矢澤さんはポケットから携帯を取り出し着信を受ける。

「あ、何アンタか……今どこだつて？ 喫茶店の……あーわかったわ」
話は一分とかからず終わったようで、矢澤さんは携帯を再びポケットにしまっていた。その間俺はずっと地面とお友達のままである。

「あー……なんか、ごめんね？ あと私は20越えてるとだけ……じゃあー！」

矢澤さんは言葉を紡ぐ間も素早い動きで荷物を纏めており、そして自分の支払い分と思わしきお金を机に置いた後、目にも留まらぬ速さで出ていってしまった。

そして、一人取り残された俺は未だに額が地面に熱烈なキスをかました状態のままだ。このままでは流石に店側にも迷惑をかけるだろうと思い、立ち上がった俺は素早く会計を済ませる。お客さんは皆一様に目を逸らしており、やはり選択肢ってクソだと改めて思いながら店を後にする。

店を出るまではどうにも視線を感じながら形容しがたい居心地の悪さが全身を支配していたのだが、それ以上にの矢澤さんの先程の最後の一言が頭の中で引っかかっていた。

あの時確かに20は越えている、と言っていた。つまり、少なくとも大学生、下手をすれば社会人の可能性すらある。そして20という数字。

もし、この世界がラブライブの世界なら……

「三年後の世界なのか……？」

選択肢の事だから十分にあり得るのだが、穂乃道という人物が示すのはラブライブの世界とは少し違うという事だ。いくらなんでもそっくりすぎる。このままだとμ'sのメンバー全員の似たような男キャラが出てくるんじゃないか……。

「……あぁ」

わかったぞ、だから

「ホモライブ……か」

ラブライブの世界だけど、主人公たちは男の子だよ！しかもラブライブのキャラそっくり！（でもラブライブのキャラもいるよー！）

結局はこういう事なのだろう。ならば俺が選んだラブライブの世界に行く。という選択肢もあながち間違っではない。それにしても意地汚いというレベルを遥かに超えている。

色々と真実がわかったとは言っても、結局俺がどうすればいいかなんて皆目見当つかない。そんな俺の不安を読み取ったかの様に再び脳の中に声が響いた。

選ぶんだよ、あくしろよ

明日から、学園！（一年で終わるかも

明日から社会人！（終わるかも

明日は良い日になる！（曖昧

あのさあ……

やる気はあるんでしょうか……。

結局は、選択肢に引っ掻き回されるだけだ。だがやるしかないんだ。

「おーい、矢澤先輩」

本来待ち合わせ場所である場所には、最近では毎日の様に見ている顔がいた。それは当たり前と言えば当たり前なのだが。

「ああごめんなさい。ちょっと色々あって」

さっきまでの事はどうにも説明しづらいような事の連続であったので、あえて言葉を濁しながら返事を返す。

「色々？ 何かあったんですか」

まあ勿論突っ込まれるだろうとは思ってはいたものの、やはりなんともしづらい。

「えーと、アンタに似た人に、アンタに似た事をされたと言っても言っておくわ……」

そう、間違っではない。今の見た目に似た人に、昔と被ることをされたのだ。……うん、間違っでない。

「うん、まあよくわからないですけどまあいいです」

「なんか申し訳ないわね。でもこれ以上いい説明ができないから」

「とりあえず話はまた今度暇なときにでも。今はとにかく行きましょうよ」

そう言っただけは片手をこちらに差し出して来る。もうすっかり慣れた物だ。以前は二秒で恥ずかしくて拒否したこともあったのだが。『って言うか、いい加減先輩って言うのやめない？ そういつ関係でもないんだから』

かれこれ三年近い関係だが、この先輩という癖は何度が注意したのにも関わらず直らないのだ。まあ私も満更ではないのだが、こつ雰囲気とか。

「ええ……でも先輩は先輩ですし……」

「でも、じゃないわよ。いい加減、ね？」

「……わかりましたよ。矢澤さん」

「なんか他人行儀ね」

「……」

久しぶりに彼の口から聞いた私の下の名前。何度も言っただけは貰えないので、この一言だけで十分幸せでもある。我ながらチヨロいものだとは思っが。

「うん。じゃあ行きましょ？」

私は差し出されていた手を握り返しながら、移動の催促をする。少しづつづつした男らしい手。私の小さい手はすっぽりと彼の手の中に納まる。

「あーなら俺の名前も呼んでくれてもよくないですか？ 結局アンタ

とかしか言われてない気がするんですよ」

実は、私は自分の名前は呼ばせるが、彼の名前は滅多に呼ばない。ただ恥ずかしいから言っていないだけなのだが、何故か昔からの癖でアンタと言ってしまう。これでは人の事を言えたものではないのだが、そこは複雑な乙女心という事で誤魔化してきた。

「いいじゃないの。別に　　なんだから」

「なんか腑に落ちねえ……まあいいや。それより早く行きましょ？」

「うんー！」

「ごめんね？今は呼ばないけど……キチンと名前を呼ぶ時もあるよね？」

それは勿論　　ナイシヨです

人と人がせわしなく行きかう駅の近くでは、あっという間に彼女と彼女の影はその人ごみの中に溶け込んでいってしまった。